

特集
まえがき

中国地方の鉄路と地域公共交通のこれから

関 耕平

谷川俊太郎が新幹線開通時に創作したものと
いわれる、「急ぐ」という詩がある。

こんなに急いでいいのだろうか
田植えする人々の上を
時速二百キロで通りすぎ
私には彼らの手が見えない
心を思いやる暇がない
この速度は早すぎて間が抜けている
苦しみも怒りも不公平も絶望も
すべては流れてゆく風景
こんなに急いでいいのだろうか
私の体は速達小包
私の心は消印された切手
しかもなお間にあわない
急いでも急いでも間にあわない

ここで谷川が「早すぎて間が抜けている」と喝破し、「急いでも急いでも間にあわない」と表現する感覚は、ローカル線に対する単なる郷愁ではない。効率や採算性を過度に追求している日本社会への警句である。

効率や採算性が社会にとって大切であることはいままでもない。しかし、「田植えする人々」の手元が見えて、人間が人間らしく生きる農山村風景を車窓から望むことができるローカル線、ひいてはその沿線である農山村地域が体现している価値は、今後の日本社会にとって、さらに大切なものであると言える。ローカル線廃止は、こうしたものが消えゆくことをも意味している。

にもかかわらず、ローカル線廃止への動き

は北海道を端緒に全国へと広がり、本特集で取り上げた芸備線のように、本州においてもにわかに焦点化されつつある。廃線に向けた動きをどのように捉えたらよいのか、対抗論理はどのようなものか、ローカル線維持と地域公共交通の再生のために、沿線自治体や住民、事業者や国をはじめ、それぞれの主体に求められていることは何か、早急な検討が必要である。

本特集は、こうした課題を多面的に検討し、応えようとするものである。本特集の重要なメッセージの一つは、ローカル線廃止問題が地方切り捨てと新自由主義政策の象徴だ、という点である。したがって、鉄道・交通論といった専門分野にこだわることなく、さらに多くの（特に若手の）研究者の参入によって多面的な鉄道の価値や政策論にかかわる議論を活発化させ、ローカル線の維持に向けて英知を結集することが、日本社会全体の今後を展望するうえでも大きな意義を持つ。本特集が、こうした議論のひろがりの端緒となれば幸いである。

なお本特集は、2024年10月19日（土）に岡山大学において開催された日本科学者会議 第31回中国地区シンポジウム「中国地方の鉄路と地域公共交通のこれから」の登壇者が執筆した。シンポジウム当日は登壇者間の意見交換が活発に行われ、それら討議の結果も踏まえて執筆されている。シンポジウム開催にあたってご尽力いただいた関係者の方々に、心よりお礼申し上げたい。

（せき・こうへい：島根大学，地方財政論）